

令和7年度

研究紀要

第57号

佐賀県小中学校校長会

佐賀県小中学校校長会

研究紀要 第57号

目次

I	はじめに	研究部長	江島 裕章・・・P1
II	令和7年度	佐賀県小中学校教育研究大会	各分科会報告
○	第1分科会「魅力ある学校経営」		・・・P2
・	小学校提言者	神崎市立千代田西部小学校	校長 横地 千恵子
・	中学校提言者	佐賀市立諸富中学校	校長 下川 登志雄
○	第2分科会「創意ある教育課程」		・・・P4
・	小学校提言者	佐賀市立久保泉小学校	校長 中村 佳代
・	中学校提言者	唐津市立馬渡中学校	校長 原口 真
○	第3分科会「教職員の指導・育成」		・・・P6
・	小学校提言者	小城市立三日月小学校	校長 西村 雪彦
・	中学校提言者	伊万里市立南波多郷学館	校長 多久島 一仁
○	第4分科会「学校の危機管理」		・・・P8
・	小学校提言者	みやき町立三根西小学校	校長 松尾 尚子
・	中学校提言者	武雄市立北方中学校	校長 田中 政紀
○	第5分科会「今日的教育課題」		・・・P11
・	小学校提言者	唐津市立鬼塚小学校	校長 栗本 洋二
・	中学校提言者	鹿島市立東部中学校	校長 横尾 文雄
III	令和7年度	研究部員及び研究部対策委員名簿	・・・P13

はじめに

令和7年度 佐賀県小中学校校長会
研究部長 江島裕章

昨今の社会の急速な変化は、学校教育の現場にも様々な影響をもたらしています。先行き不透明で予測困難な時代、または変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字を取って「VUCA」の時代とも呼ばれる昨今、中央教育審議会答申では、我が国の学校教育と教師を取り巻く環境整備の基本的な方策として、「学校における働き方改革の更なる加速化」「教師の処遇改善」「学校の指導・運営体制の充実」を一体的・総合的に推進する必要があると示しております。そして、それら学校教育の推進と変革の舵を取る校長は、単なる組織マネジメントの役割だけでなく、広い見識と持続可能な教育に関する手立てを打ち出し、そして実行できるリーダーシップが求められております。

このような状況の変化に対し、私たち校長は、これまで以上に確固たる経営理念と学校改善に向けた強い使命感をもち、今日の教育課題や各学校の課題に、「令和の日本型学校教育」「社会に関かれた教育課程」「チームとしての学校」「働き方改革」などの視点から、会員相互が連携協力し立ち向かっていかなければなりません。

佐賀県小中学校校長会では、今年度「互いの尊重と協働のもと、しなやかさを持ち、高きに和す、存在感のある校長会」をスローガンに、大会主題「未来を切り拓き、新たな社会を創る日本人を育てる教育の推進」を設定し、研究に取り組んできました。

この研究を推進するために、今年度、県校長会研究部では、学校が直面する課題を解決することを目的に、2回の「校長会理事研修会における教育課題研修会」、そして11月の「佐賀県小中学校校長会教育研究大会」を開催しました。

ここに、それらを取りまとめた「研究紀要第57号」を発行いたします。今年度の、研修・研鑽の成果を、すべての校長先生方へ還元し、今後の更なる学校運営の充実・発展につなげていただければと思います。「研究集録」とあわせてご覧いただき、学校経営の一助とされていただければ幸いです。

最後になりましたが、全国大会や九州大会、そして「佐賀県小中学校校長会教育研究大会」において、ご提言くださった校長先生、それを支えてくださった各地区研究対策委員をはじめとする各地区校長会の皆様、ありがとうございました。そして、研究紀要発行にあたり、「佐賀県小中学校校長会教育研究大会」において、各分科会の記録を取りまとめていただいた記録者の校長先生、ありがとうございました。また、すべての校長先生方に御礼申し上げますとともに、さらなるご健勝と佐賀県小中学校校長会の益々の発展を祈念いたします。

第一分科会（魅力ある学校経営）記録

提言テーマ 「組織力の向上を図る学校経営の在り方」

「地域との連携・協働を図る学校運営」

～「地域とともにある学校づくり」を目指して～

提言者[神埼市立千代田西部小学校 横地千恵子] [佐賀市立諸富中学校 下川 登志雄]

司会者[佐賀市立川上小学校 村山 輝美]

記録者[神埼市立千代田中部小学校 坂口 博之] [佐賀市立芙蓉中学校 杠 幸世]

【研究協議題】

- ・教職員の負担感を少なく組織力を向上させるための持続可能な組織力向上の手立てについて
- ・地域との連携・協働の工夫や課題、手立てについて

1 質疑応答

Q1 自主研修会は年間に何回行われているのか。また、こういった内容が好評だったのか。

A1 昨年度から自主研修会を始めた。毎月第4金曜日の放課後の時間に行っている。メンターである同学年グループの教員からしたいという申し出があって始めた。最初は、初任者の悩みを聞く会だった。宿題の丸つけ等、普通にやっていることができないということについて一人でため込まず話ができるのはよい。現在は、初任者からの質問事項や ICT、体ほぐし、学級経営等をテーマにして、得意な教員が講師となって行っている。

Q2 コミュニティスクールや部活動の実践をしたことで、子どもたちがどのように成長したのか、変容したのか、また、学校生活や授業の中でその変容が生かされているか具体的に教えてほしい。

A2 生徒指導上問題があったが、コミュニティスクールになり地域の協力をえられるようになり、子どもたちが落ち着いてきた。学習に向かう子どもも増えてきた。地域の方に「宿題をしているか」「あいさつをしているか」等、よく声掛けをしてもらい、ほめてもらえることで、町民体育大会等、ボランティア活動についてもよく参加するようになった。本校の体育大会より、よく動いている。子どもたちのコミュニケーション能力も上がってきた。単語ではなく文章として言えるようになってきた。

Q3 中学校区でのコミュニティスクールを昨年度より立ち上げているが、学校が状況を報告したことに意見を言う形であり、何かを一緒にやっていこうとなっていないことが課題。連携ビジョンにアイデアをもらった。会をもつときの留意点や協議題を教えてほしい。

A3 町内校長会で議題を育てて、その議題をコーディネーターと意見交換をしながら、それぞれの組織に事前に提示しておく、答えをもって会に参加してくれる。コーディネーターに学校と地域との潤滑油としての働きをしてもらっている。

2 グループ協議報告・まとめ

（1）Aグループより

- ・組織力の向上の課題として、若手育成とメンタルへの配慮の難しさや年齢構成の二極化、児

童数の差による負担感の差、教頭の負担増加、等が挙げられる。対応として、校内研修でメンタリングやミニ研修会の実施、持ち授業時間の軽減、各分野のリーダを決めて任せること等を行っている。日常のコミュニケーションを大事にして、一人一人に応じた指導・サポートを心掛けている。

(2) Bグループより

- ・ 組織力の向上については、学校教育目標を職員や児童と共有していくことを大切にしている。OJTは難しいが、児童下校後にフランクに情報交換をしている。
- ・ 地域連携については、学校規模によって、地域とのかかわりが違う。小規模校は、多くの地域の力を借りている。その時、地域の要望をどのようにつないでいくのかは、学校の出し方による。大規模校は、いろいろな会をつないでいく難しさがあるが、地域と根付いた活動がなされている。学校の要望を、地域が受けてくれて、子どもたちが地域に愛着をもつ取組みにつながる。

(3) Cグループより

- ・ 組織力の向上、若手育成のためにも自主研修会は必要である。ただ、どのようにして時間を見出すのが課題である。持続可能にするには、計画的にしなければならない。各校や校区でそろえて校時の見直しを行っているが、限界や縛りがある。地域は協力的でありがたいが、振り回されて断れないというところもあり、連携の難しさを感じる。

(4) Dグループより

- ・ 組織力向上については、複数クラスある学年は授業を交換し、学年で子どもを見る。大規模校では、校務分掌で誰を組織のトップに置くかが重要で、力があり信頼できる人を学年主任にする。校長は主任と週に1回のヒアリングを行い、そこで考えを伝える。また、授業の見せ合いを学期に1回行い、参観後に感想を付箋に書いて伝え合っている。

(5) Eグループより

- ・ 組織力向上について、30歳前後の職員が多いため、若手の育成が急務である。ベテラン教員の電話対応を隣で学ばせたり、主担当が代わっても引き継ぐことができるよう、避難訓練などの運営をベテランと組ませたりしている。ミドルリーダー（子育て世代）をどう育てるかが課題。
- ・ 各種委員会や各部会について、負担感を軽減しつつ内容を充実させるため、放課後の会議をできるだけ減らして時間割内に取り組む工夫をしている。

(6) Fグループより

- ・ 連携するためには、校長の学校目標が大切。学校目標をとにかく知ってもらう。地域の方、保護者にも知ってもらうことは非常に大切。伝統の継承など地域との連携はできている。あくまでも、子どもたちが主役、子どもたちが中心なので、自分のことを決めることができる子どもたちを育てるために、子どものやる気を引き出す仕掛けをしていく必要である。

(7) まとめ

これといった答えが出るという話にはならないと思うが、先生方と話したことで、自分の考えが整理されたり、ヒントがもらえたりということがあると思う。ぜひ学校に持ち帰っていただけたらと思う。

第二分科会（小学校・創意ある教育課程）記録

提言テーマ「豊かな人間性を育む人権教育の推進」

～多様な他者や集団との交流活動を通して～

提言者〔佐賀市立久保泉小学校 中村 佳代〕

提言者〔唐津市立馬渡中学校 原口 真〕

記録者〔佐賀市立金立小学校 泊 裕人〕

記録者〔唐津市立七山中学校 田中千恵子〕

司会者〔唐津市立西唐津中学校 佐藤 彰〕

【研究協議題】

- ・創意ある教育課程を編成する際の軸、実践例、課題

1 質疑応答

- ・特になし

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Aグループより

- ・県内とはいえ、それぞれの学校の置かれた状況が違う中で、その場に応じた教育課程を編成していくのが重要。創意ある教育課程を組むためには、地域連携も重要なポイントとなるので、学校、地域の思いをすり合わせながら実施していく必要がある。

(2) Bグループより

- ・小中連携や地域連携などについては、環境・状況を踏まえ、再度、目的を整理して見直すことが必要となってくる。また、効率ばかりを考えるのではなく、学校に残っているものを大切にしながら、どのように良い方向に変えていくのかの工夫も必要となってくる。

(3) Cグループより

- ・学校規模によって課題の内容は変わってくる。新規採用職員など若手の人材育成、働き方改革などにメリットがあるチーム担任制は、創意ある教育課程編成の1つの方法だと考えられるが、核となる職員の存在や人員（数）が必要となるので、その部分は課題だと考える。

(4) Dグループより

- ・多くの学校で地域人材や団体を活用したさまざまな教育活動が行われている。活動自体は定着しているが、体験ありきで学習につながっていない面も見られる。学校に余裕がなくなってきた今、教育課程自体の思い切った改革が必要なのではないか。

(5) まとめ

- 学校規模によって、教育課程編成に係る学校の課題が大きく違っていた。児童生徒の実態はもちろんのこと、保護者や地域の願い、地域性も大切にした特色ある教育課程を編成することが大切で、そのことが、それぞれの学校の強みを生かした特色ある学校づくりにつながると思われる。日々の学校経営の中で、校長として思い悩むことも多いかとは思いますが、本日の協議の中でそれぞれの先生方が思いを話され、笑顔になられたことが一番の成果ではないかと考える。

第二分科会（中学校・創意ある教育課程）記録

提言テーマ「つながりを育む教育課程の編成と運用」
～離島の強みを生かした特色ある学校づくりをめざして～

提言者〔佐賀市立久保泉小学校 中村 佳代〕

提言者〔唐津市立馬渡中学校 原口 真〕

記録者〔佐賀市立金立小学校 泊 裕人〕

記録者〔唐津市立七山中学校 田中千恵子〕

司会者〔唐津市立西唐津中学校 佐藤 彰〕

【研究協議題】

- ・創意ある教育課程を編成する際の軸、実践例、課題

1 質疑応答

- ・特になし

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Eグループより

- ・ 学校規模によって課題が違っている。小規模校では縦のつながりはできるが横のつながりが弱い。オンラインでの他校との交流も考えられるが、金銭的なことを考えると頻繁にはできない。中規模校では特別支援学級授業や教育相談室運営に係る人手が足りず、適正な教育課程を編成することが難しい面がある。

(2) Fグループより

- ・ 市町立の学校なので、それぞれの市町が打ち出しているビジョンを教育課程に盛り込んでいくことが求められるのではないかと。実際に設置者から降りてきている内容を教育課程の中に組み入れ、市全体の学校で創意ある教育課程に取り組んでいるところもある。

(3) Gグループより

- ・ 隣接する小学校と授業をし合い、縦のつながりを重視する取組を行ったり、近隣の中学校へ交流に行ったり、遠方の中学校と生徒会同士の交流の機会をもったりして、横のつながりをつくる取組を行ったりしている。さらに、同じ地域にある特別支援学校や大学等とも交流を行うなど、学校の置かれた地域の特色等を生かした交流を仕組み、価値観を広げる場の設定を行っている。

(4) まとめ

- 学校規模によって、教育課程編成に係る学校の課題が大きく違っていた。児童生徒の実態はもちろんのこと、保護者や地域の願い、地域性も大切にした特色ある教育課程を編成することが大切で、そのことが、それぞれの学校の強みを生かした特色ある学校づくりにつながると思われる。日々の学校経営の中で、校長として思い悩むことも多いかとは思いますが、本日の協議の中でそれぞれの先生方が思いを話され、笑顔になられたことが一番の成果ではないかと考える。

第3分科会（小学校・教職員の指導育成）記録

提言テーマ「将来を見据えた教職員の人材育成について」

～人材育成の視点の整理と強みをいかした取組を通して～

提言者〔小城市立三日月小学校 西村 雪彦〕

司会者〔有田町立大山小学校 馬場 美奈〕 記録者〔小城市立砥川小学校 野田 経代〕

【研究協議題】

- ・協議の視点：多様な職員への指導・育成について、学校や地区の取組の実際について

1 質疑応答

- ・なし

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Aグループより

- ・ 小規模から大規模までいろいろな学校があるので、様々な考え方がある。その中で良い事例の一つとして、年齢構成を考慮して担任を組み合わせることで臨場感のある取組ができているという紹介があった。
- ・ 今いる人員でどう活性化するかという考え方が大事。互いに授業を見合うことや、それが難しい小さな学校では、給食指導を回すことで、先生方のとらえ方が違ってきた。

(2) Bグループより

- ・ 職員の実態を把握し、活躍の場を保証する。認め、ほめることが大切。人事評価を活用し、ヒアリングの機会を大切にして意欲向上を図っている。
- ・ 職員の組み合わせ（若手とベテラン等）を工夫することで、育成することができる。単学級の学校ではグループ学年主任を設け、指導力向上、困り感解決に繋げる事例も。

(3) Cグループより

- ・ 各学校（規模の違いもあり）それぞれ課題の違いがある。（校長が）職員の人間関係を作る、繋いでいくことで、自然にアドバイスし合えるようになると考える。
- ・ キャリアプランの見える化は、職員の意識付けのためにとても有効。管理職に向けての意識を高めていくための、年齢構成グラフも有効。

(4) Dグループより

- ・ 多様な職員（特に若い世代の先生方）にどう接していくかは共通の悩み。メンタリングに取り組んでいる学校があり、4つの課題（若手育成・ミドルリーダー育成・同僚性・働き方改革）に対しメンタリングの取組が効果を上げた。校長は先生方の思いをしっかりと把握し、何を学びたいかでペアリングする。
- ・ メンタリングをきっかけに、職員が自分たちで動き始め、長期休業中の研修・研究の時間が減り、本当に学びたいことに時間を使えるようになった。
 - ・ 管理職が直接動かず、誰が主導すれば効果的か考えて任せることと、勤務時間内でやっていくことが大切。

(5) まとめ

- 人材育成では子どもと同じで、職員も褒めること、認めることが大事になる。またその中で、職員が何を学びたいと思っているのか、自分が伸びたいと思っている事、やりたいと思っている事等を校長が把握し、組織として取組むために繋いでいくことが大切である。

第3分科会（中学校・教職員の指導・育成）報告

提言テーマ「学校の教育力を向上させる人材の育成」

提言者〔伊万里市立南波多郷学館 多久島 一仁〕

司会者〔有田町市立大山小学校 馬場 美奈〕 記録者〔伊万里市立青嶺中学校 田中 泰司〕

【提言内容】

人材育成は人（職員）の命を輝かせるためにあるという意識で向かう。「貢献」を実感させることに焦点を当てた人材育成を。好き嫌いで仕事することが実際にはある。仕事を通した「成長」を実感させるためフィードバックを意識し、耳の痛いことも伝えるようにする。小規模校の人材配置を工夫し、カバーし合う関係づくりを本人の納得感を優先しながら進める。

偏りの大きい職員集団をつなぐシステム作りの事例紹介。義務教育学校のステージ分けでは特任指導教諭をそれぞれのステージ経営を委託し責任感ややりがいを出した。それぞれの学校の特質に応じた工夫や仕組みにより改善・成長を促す。外部人材を活用した事例では市外管理職による伊万里市ミドルリーダー育成研修会による経験の伝承による見聞の広がりを促す。頑なな職員への納得感を得させる難しさや、常識の違いの溝の大きさが課題として挙げられる。

1 質疑応答 特記事項なし

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Eグループより

- ・多様な職員への指導・育成について～部活動顧問を拒否する40代職員へは本人に他の校務分掌を選択させたことが功を奏した。
- ・30代に研究主任を任せ研究に向けての経験を積ませた。
- ・土日の部活を望まない職員（家庭の事情）への対処～もう一人の若手がどうしてもいけない場合に指導を依頼した。
- ・コミュニケーションが取れない若手職員～校務分掌を任せることで育成を図る。
- ・大規模校内での各組織の中での人材育成。年配の職員が若手をリード。
- ・全校の前で話す機会を活かす。
- ・新しいことに後ろ向きである職員への指導が難しい。
- ・他県の研修、文科省の研修への派遣を積極的に行っている。立場を与えての育成。
- ・人材育成は相手の捉え方を尊重し、言葉の使い方を配慮しながら行う。
- ・部活動に関して部員数が減少する中で全員を配置しない考え方も。姿勢や考え方が統一されない中で混乱が生じている。地域性や生徒の実態の差も。生徒と深くかかわるきっかけではあるので若手にとっては機会の喪失にも。指導力のある職員からバトンタッチした職員への保護者たちの過度な期待。教職員のボランティアに頼った現状の改善が求められる。
- ・社会体育の生徒の土日の大会参加を保証する面もあり行事を平日に振りかえた学校も。

(2) Gグループより

- ・30代、40代が少なく担任は全て20代で主な主任も担っている現状。
- ・推進委員会を中心に学校運営と関連付けている。特に生徒指導では「コミック会話」が有効。
- ・研修会などで意図的に若手を表に出すことで、伝える力を育てる。
- ・人事評価面談を1時間程度実施し、将来何を中心に行っていくのかを聞き次年度に繋げる。
- ・メリット・デメリットを伝え早めに意識を持たせる。
- ・全校学年集会での若手の出番を創出したり、ミドルリーダーを活用したりする。
- ・やる気のある者にリーダーを任せる。
- ・校長室にホワイトボードを設置し有効活用する。

(5) まとめ

- ・それぞれの対話でのやりとりを今後の経営に活かしていきたい。つながりをもって孤立せずに学校経営に携わっていきましょう。

第4分科会（学校の危機管理）報告

提言テーマ

「地域の特性を理解し、保護者・地域・行政と連携した防災教育の取組」

提言者〔みやき町立三根西小学校 松尾 尚子〕

記録者〔みやき町立中原小学校 大家 淳子〕

司会者〔鳥栖市立鳥栖北小学校 長尾 真司〕

【研究協議題】

- ・学校組織の充実と、地域との連携を図った意図的・計画的な取組の推進
- ・自ら判断・行動できる子どもを育てる安全教育の推進

1 質疑応答

Q1 2年ごとに安全マップを更新しているということであるが、更新した内容を知りたい。

A1 本地区では、住宅地が増えたり、大きな施設ができたりして、地域全体の姿が変化している。新しくなっている地域を中心に更新を行った。また、道路の冠水や川の増水が頻繁に起きる場所については、写真を掲載するなどの更新を行った。

Q2 大雨の際、地域の区長や消防団との情報伝達、連絡体制はどのように行っているか。また、危機管理に対する人材幾瀬はどのように行っているか。

A1 地域から具体的な道路の冠水や川の増水の情報が集まってくる。職員をどのように配置したほうがよいか、通行不可の状況はどこかなど、様々な情報提供により校長が判断する。人材育成については、校内で行う避難訓練について危機意識をもって取り組むことが大切。休み時間を使って実施するなど研修の設定の仕方を工夫していく必要がある。

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Aグループより

- ・地域性による災害リスクの違いを共有した。避難や職員配置の難しさ、地域住民との協力の課題を確認できた。

(2) Bグループより

- ・防災教育や訓練の情報交換を行った。保護者の危機意識向上や引き渡し訓練の実施方法の工夫が必要である。

(3) Cグループより

- ・小中連携や地域と協働した防災教育の重要性を確認できた。自衛隊との活動事例も共有し、実効性向上を検討したい。

(4) Dグループより

- ・引き渡し訓練の規模や場所による課題を議論した。防災意識を高める工夫として「知る・考える・覚える」を重視したい。

(5) Eグループより

- ・中学校での引き渡し訓練の困難さを共有した。原子力防災や垂直避難など地域特性に応じ

た対応の必要性を確認した。

(6) Fグループより

- 雷による危機管理を中心に話し合った。部活動時の対応や雷アラート導入の必要性を感じた。

(7) Gグループより

- 総合的な学習の時間を活用した防災教育や職員研修の必要性を確認した。避難時の簡易トイレなど物資確保の課題も共有できた。

(8) まとめ

- 小学校部会では、地域連携の重要性について報告があった。中学校部会では、総合的な学習の時間を活用した防災教育や仕組みについて共有された。協議では、学習実践の違いを踏まえ、職員や保護者の防災意識向上が課題とされた。今後、地域と学校が連携し、防災意識を高める取り組みを進める必要がある。

第4分科会（中学校・学校の危機管理）報告

提言テーマ・安全・安心な学校にするために

～過去の災害に学ぶ市内小中学校の防災・減災取組～

提言者〔武雄市立北方中学校 田中 政紀〕

記録者〔武雄市立川登中学校 記伊 善弘〕

司会者〔武雄市立橘小学校 坂井 文明〕

【研究協議題】

- ・ 防災・減災の意識を高める生徒の育成をめざして。

1 質疑応答

- Q1 実際の引き渡しの際には保護者本人確認が難しいが、一見知らない保護者をどのように確認するのか、その改善の方向性とかがあれば、教えてほしい。
- A1 引き渡し時の確認をどのようにするかという、生徒本人の関係者であるかどうかの確認の仕方についての方向性は、まだ決まっていない。緊急時なので、生徒本人に、身近な人なのか、親族なのかを確認する以外はないと考える。過去の経験では警察官が生徒を迎えに来たことがあったが、その警察官を疑うことからしなければならないと思ったこともある。最近は偽警官が家を訪ねてくる現状があるので、きちんと確認することが大切だと感じる。

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Eグループより

- ・ 引き渡し訓練の困難さが地域性、地理条件、学校規模により異なることが確認された。特に、玄海原発近隣校では職員の被ばくを防ぐため、原子力防災に特化し、カード運用を工夫しているが、校長による身を挺した対応の必要性も論点となった。また、風水害重点校では垂直避難から開始。全職員が重要物品の配置やトップ不在時の行動を共通理解し、学校の特性に応じた防災訓練の継続的なアップデートが不可欠であると結論付けられた。

(2) Fグループより

- ・ 部活動中の安全管理における雷への危機意識が高まり、主要な議題となった。雷注意報発令時の即時室内退避は実施されているが、武雄地区の中学校の事例として、落雷によるサーバー停止と業務支障も報告された。雷への具体的な対策として、伊万里地区の中学校では顧問に「雷アラート」を持たせており、その有効性を確認。しかし、機器が高価であるため、各学校での導入は難しく、教育委員会へ一括での導入を要望すべきとの結論に至った。

(3) Gグループより

- ・ 地域差のある防災意識の向上のため、総合的な学習での災害学習の必要性を確認した。引き渡し訓練では、小中学校連携時の順番設定や中学校を意識した対応が課題。また、「学校が最も安全」という前提から、帰宅の是非を検討すべきとした。垂直避難時の簡易トイレや水の備蓄が予算の制約で進んでいない現状が報告された。職員の対応力向上のため、東日本大震災等の事例から学ぶ研修の実施が求められた。

(4) まとめ

- 小中各グループ協議では、地域連携の重要性や総合学習による防災教育の推進など、活発な意見交換と考察が行われた。各学校の地域性の違いを踏まえた上で、協議の最も重要な共通認識として、職員、保護者、児童生徒の三者一体となって、防災意識の継続的な向上に取り組む必要性が明確に確認された。

第5分科会（小・中学校・今日的教育課題）報告

提言テーマ「子供の居場所づくり」～教育支援室「スマイル」との連携～

提言テーマ「教育活動の質を高めるための学校づくり」～校内外の連携を通して～

提言者 唐津市立鬼塚小学校 栗本 洋二
記録者 唐津市立湊小学校 浦元 奈美
司会者 嬉野市立久間小学校 坂井 まゆみ

提言者 鹿島市立鹿島東部中学校 横尾 文雄
記録者 嬉野市立吉田中学校 土岐 洋二

【研究協議題】

- ・ 校内外の連携を通じた校長の役割について

1 質疑応答

Q 1 スマイルでの活動は、通知表では出席扱い、出席簿では出席扱いではなく但し書き扱いだということだが、要録上の扱いはどのようなになっているか。

A 1 唐津市教育委員会が出している出席簿の記録要領から回答。通知表は出席扱いとし、備考欄に教育支援室〇日と記載してもよい。指導要録では出席扱いとする。備考欄に教育支援室〇日と記載するとなっている。

Q 2 鹿島東部中学校では精力的に取り組んであるが、働き方改革の観点からはどうなのか、職員への理解を得るためにどんなことをされたか。

A 2 （働き方改革について）

個別最適な学びの実現につながると考え、鹿島市の小中学校でロイロノートの導入をすすめた。アプリは、「教材作成に時間がかからない」「生徒への教材配布や回収が簡単」など業務の効率化ができ、働き方改革につながっている。また、月1回行っている校区内の校長会で小中が連携して校時の変更などを進めている。

（職員への理解）

月1回の職員会議で校長会で話したこと研修会の内容を、資料をつかって丁寧に説明している。

Q 3 外部講師を招聘した保護者対象の情報モラル研修は実施したか。

A 3 各小中学校で年1回それぞれで実施していたが、地域の課題や実態に即していなかった。今回、アンケートで携帯電話の所持率を調査したところ、小学校1年生の3分の1が携帯電話（キッズ携帯でないもの）を所持していることや鹿島市では教育委員会、校長会、保護者会などで携帯電話のルールづくりを促しているが、実際は、21時以降も使用していたり、平日3、4時間使用していたりするなどの実態が明らかになった。東部中学校では、夏休みの二者面談や三者面談でプリントを配布し、ルールづくりを個別に呼び掛けている。

2 グループ協議報告・まとめ

(1) Aグループ

児童生徒の別室対応については、特配要望とともに要求をした学校もある。適応指導教室は距離の問題がある。学校選択制の導入（大規模校の児童が小規模校を選択できる）や小規模特認校については、いずれも保護者の送迎が課題である。連携については、CSにより地域とのつながりが進んでいる学校も多いが目的にずれがあったり、変更が難しかったりと課題もある。児童生徒の課題については、校長が外部（病院）ともつながる必要も感じている。

(2) Bグループ

子供の居場所づくりでは、地域でかなり差がある。サービスのいいところでは児童生徒の送迎を行う市町もある。市で人を雇っているところもあれば、地域の中から、元先生・民生委員の方々などに協力をいただいている学校もある。校長の役割は、小中連携や関係機関との連携、地域への働きかけなど。特に、定期的な民生委員との打ち合わせ、情報交換、お願い事をまめにするのが大切。

(3) Dグループ

嬉野市の大規模校には校内に別室支援教室があり、常勤（6時間）の講師さん二人が交代で勤務。児童が通いやすい。武雄市では、適応支援教室「スクラム」教室があり、市の職員が担当している。市の関係機関がスマイル会議で協議をし連携している。また、神村学園がNPO法人と連携して小中学生の居場所「みんなの学校」を週4時間開催。交通費が市から補助されている。子供を卒業させても、中学校での状況を情報共有している。

小中連携の時間が取れず形骸化している中で、集まらずにチャットの中でワークシートを共有するなどのICTを活用した連携などもあり、新しい連携の在り方を考えていければと考える。

(4) Eグループ

校長には、行政への働きかけから、小中連携・中高連携、定期的な地域（民生委員）との情報交換など様々な役割がある。児童生徒の居場所づくりについては、地域によって差がある。伊万里市は、R7年度に予算化され、別室支援員が3名配置された。基山は、文科省の不登校対策事業がスタートし、予算は、国・県・市町が3分の1ずつを負担。鏡中では、退職校長がボランティアで別室支援員として対応してもらっている。

(5) Fグループ

不登校については、学校だけでは限界があるので、市町や関係機関と連携していかなければならない校長としての役割はつなぐこと。生徒の自己肯定感や有用感を高めるには、生徒が前面に出ていく活動でも、職員と一緒に作り上げていくことが大切。

(6) まとめ

児童生徒の今日的課題解決に向けては、関係機関や地域の人々との連携が欠かせない。本日、共有し合った各校の実践を参考に、自校の実情に合わせて支援体制・連携体制を強化していきたい。

令和7年度 研究部員及び研究部対策委員一覧

役職名	地区名	氏名	学校名
部長	(県校長会理事会)	江島 裕章	みやき町立三根中学校
副部長	〃	松尾 寛	武雄市立山内西小学校
部員	〃	山領 ひとみ	白石町立白石小学校
〃	〃	横山 千晴	佐賀市立三瀬中学校
幹事	〃	福田 泰司	吉野ヶ里町立東脊振中学校
対策委員	鳥栖基山	長尾 真司	鳥栖市立鳥栖北小学校
〃	三養基	吉岡 功太郎	みやき町立北茂安小学校
〃	神崎	廣瀧 由紀子	神崎市立神崎小学校
〃	佐賀市	村山 輝美	佐賀市立川上小学校
〃	小城多久	高山 健	小城市立晴田小学校
〃	唐津	佐藤 彰	唐津市立西唐津中学校
〃	伊万里市・西松浦郡	馬場 美奈	有田町立大山小学校
〃	武雄市	坂井 文明	武雄市立橘小学校
〃	杵島郡	中村 初男	白石町立須古小学校
〃	鹿島嬉野藤津	坂井 まゆみ	嬉野市立久間小学校
事務局長		江口 浩文	佐賀県小中学校校長会事務局
事務局員		小川 裕子	〃

佐賀県小中学校校長会事務局

〒840-0814

佐賀市成章町2-16 (財団婦人佐賀県婦人会館内 3F)

TEL・FAX (0952) 24-8669

E-mail kouchoukai@wing.ocn.ne.jp